

徳法寺

未知なる恐怖との戦い

杉谷 浄

昨年、東京の中野にある「哲学堂公園」を訪れました。この公園は、明治時代に井上円了が作った「哲学堂」を東京都が譲り受けたもので、今年国の名勝に指定されました。公園内には、ソクラテス・カント・孔子・釈迦を祀った「四聖堂」や、門の両側に仁王像の代わりに天狗と幽霊が置かれている「哲理門」、日本の聖徳太子・菅原道真、中国の荘子・朱子、インドの龍樹・迦毘羅という東洋の哲人が祀られている「六賢台」、神学・儒学・仏教学の碩学である平田篤胤・林羅山・釈凝然を奉崇している「三学亭」などがあり、無料公開されています。

井上円了（1858年-1919年）は、明治を代表する仏教哲学者で、真宗大谷派の僧侶でもありました。新潟県の慈光寺に生まれ、東本願寺の国内留学生として東京大学予備門に入学し、さらに東京大学文学部哲学科卒業後は、国家主義の立場からの仏教改革、護国愛理の思想などを唱えました。

井上円了は「お化け博士」や「妖怪博士」としても知られています。明治時代には、まだ日本中を妖怪が跋扈していました。つまり、多くの人が実在の存在として妖怪を信じていたということです。井上円了と同時代を生きた小泉八雲（1850年-1904年）や、南方熊楠（1867-1941年）、泉鏡花（1873年-1939年）、柳田邦男（1875年-1962年）などは、様々な角度から妖怪と取り組みました。小泉八雲や泉鏡花が、妖怪の中に垣間見える人間の内面性に着目したのに対して、井上円了は妖怪という迷信から人々を解き放つために、全国の妖怪を研究し『妖怪学講義』などを著しています。また、当時流行していた千里眼などの超能力のからくりを暴くことにも努めました。

そこで井上円了が目にしたのが、明治時代に普及した西洋の宗教や哲学でした。感覚的な恐怖心や迷信を打ち破るためには理性と知識が有効であると考えたのです。そうして建てられたのが「哲学堂」です。当初はこれを大学にするつもりでしたが、より多くの人に広めることを望み、遺言により東京都に寄付されました。代わりに本郷に「哲学館」を建てて哲学教育の場とします。これが現在の東洋大学です。

この公園を歩くと、幅広く宗教や哲学を取り入れようとしたために、未消化のまま迷走しているようにさえ思えます。しかし、この無謀とも思える試みが、多くの哲学者や神話的宗教観から脱却した近代的な宗教学者が生まれる一つの契機となり、日本中の人が妖怪という恐怖から解放される

きっかけを生んだのです。井上は哲学館大学学長を辞してから、全国を巡回して講演活動を行い、遊説先の満州・大連で脳溢血のため急死するまで、哲学や宗教学を日本中に伝えることに尽力しました。皆さんも一度この公園を尋ね、井上円了の功績に思いをはせてみてはいかがでしょうか。



哲学堂公園 哲理門 向かって右に天狗、左に幽霊の像が安置されている

先住民遺骨返還プログラム

杉谷 紬

昨年の九月に一週間ほど、オーストラリアで開催された、先住民遺骨返還プログラムのワークショップに参加してきました。開催地はアデレードという南部海岸地域の都市で、オーストラリアの中では南極寄りの比較的寒冷な地方にあたります。赤道をまたぐため、現地ではやや春めきつつも冬の名残を留めた肌寒い日々が続いていました。アデレードは海岸と河川に囲まれたオーストラリアでは稀な水の恵み豊かな地域で、先住民の中でも大規模な部族を形成するンガリンジェリ族が暮らしてきました。

ワークショップを主催するのはオーストラリア国立大学の先住民研究センターです。参加者は大学や博物館の研究者、先住民遺骨返還に関わってきたグループの代表者が主ですが、私のような大学院生も出身や所属大学を問わず参加していました。ワークショップの日程の大半は先住民のコミュニティセンターで行われ、参加者の多くは近隣の合宿所で共同生活をしました。合宿所では食事や清掃などは自分たちで行います。ワークショップ以外でも、夕方には他の学生たちと散歩に出かけたり、夜には先住民の権利などにまつわる映画を一緒に見たりしたの

で、参加者同士の交流は一日中続きました。ワークショップでは、参加者による発表や議論の他、ンガリンジェリ族ゆかりの場所や、先住民の資

料を集めた博物館などへの視察も行われました。特に印象に残ったのは世界中から返還された遺骨・遺物の保管庫の見学です。平屋の大きな保管庫の中には無数の段ボールや木箱が詰め込まれていました。一部の遺物や遺骨は整理のために机の上に置かれていたので直接見る事ができました。しかし、ほとんどは箱に記載されたメモ書きからかろうじて中身を推測できるにすぎません。ただ、その量の莫大さを前にしたとき、それらがかつて不当に持ち去られ、尊厳のない扱いを受け、今もここに仮置かれたままであることを思うと発する言葉を失いました。

保管庫を出ると、参加者は焚火の周りで大きな輪になりました。特別な植物を焚き一人ずつ進み出るのはその煙を浴びるといふ、先住民の伝統的な儀式を行ったのです。今回のプログラムを通して、先住民遺骨返還が、歴史的経緯によりトラウマを負った先住民のアイデンティティと共同体の回復のための切実な取り組みであることを強く意識するようになりました。はじめは、直接の知り合いでもない昔の人の骨のためになぜ活動するのかと思うこともありましたが、しかし今は、先住民遺骨返還は先住民と血縁的・文化的なつながりを持つ現代の人々にとって、踏みにつられた自身のルーツを受け入れて生きていくために必要なプロセスであると考えています。

十九世紀にイギリスの植民地支配が進んだオーストラリアの自然や文化は西洋からの好奇の目にさらされ、学術的資料や、有力者のコレクション、または見世物として、先住民にまつわる沢山のものが海を渡りました。学問の風潮が研究のために大量の人

骨を集めて比較することを要請するようになると、非合法に遺骨や副葬品が集められる動きは世界中で加速しました。日本でも数多のアイヌ民族の墓が秘密裏に暴かれ国内外に流出したのです。

先住民遺骨返還は法的、政治的、歴史・考古学・人類学的、文化的、科学的に極めて複雑に絡み合った問題を扱う運動です。返還のための調査や交渉から、返還の際の名目や声明、返還時に行なうイベントや儀式の復活、返還後の再埋葬や引き取り、遺伝子の検査、展示される場合の方法など、議論するべき点は多く、見解は一致しません。しかしその複雑さを一つずつ乗り越えていくことができた時、私たちの社会はより成熟したものになっていると思うのです。



見学した施設の一つで目にした絵画
ペリカンやカラス、魚、蛇などの現地の生物や自然を伝統的な形式を用いて描いている

死に至る病

杉谷 伊吹

こんにちは、今回は不穏な題で書かせて頂きます。ときに、私がこの記事を書いている「今」は四月の初頭です。皆様が読んでおられる「今」は、その一ヶ月後ぐらいでしょうか。この時間のズレがあるの、なるべく時事ネタは書かないように心掛けてきました。しかし、このたび世を騒がせている新型コロナウイルスに関して、一ヶ月程では収まっていないうと予想をたてて書いております。経済的な損失からの脱却にかかる期間も含めると、長期に渡って世の中に影を落とす問題となるでしょう。

さて、ここまでの話で「死に至る病」をコロナウイルスの事だと誤解させてしまったと思います。実はそうではありません。まずは著書としての『死に至る病』について少し解説します。『死に至る病』は、一八四九年にデンマークの思想家、セーレン・キルケゴールによって著作された哲学書です。第一部「死に至る病とは絶望である」と、第二部「絶望とは罪である」の二部で構成されており、「絶望」という人間の在り方に関して分析・探求した本だと言えます。これがなかなか読み解くのも難解なので、分かる部分だけ論じていくことにします。

まず、「絶望」とは何であるかという話です。キルケゴールの説く「絶望」には幾つかの分類があります。一番目は、自分の外側の刺激に没頭し、自分自

身の制御を放棄するという感性的な生き方に在る「絶望」です。もつとザツクリした言い方をすると、利他的で、考えることを諦めて快樂に流される在り方を「絶望」と表現したのです。このような、自分を見失った状態においては、「絶望」しているという自覚すらあまりしていません。自分が迷っている存在であることすら分らない、という仏教の考え方に近いものを感じます。そして、この「絶望」の特徴は「無責任な行動」として現れます。そもそも自分で決断していませんから、行動の結果に責任を感じないのは当然の流れです。これは決して珍しい事象でもなく、ありふれた『絶望』の在り方です。

二番目と三番目は、それぞれ自分と向き合う際に在る「絶望」です。基本的に、自分と向き合う事は耐え難いものです。なぜなら、自分の弱い所、愚かさ誰だつて直視したくは無いからです。そしてその末に、認めたくない自らの本質を嘆いて、受け入れられないという状態。それが、二番目の「絶望」の在り方です。思い通りにいかない苦しみ、内面的な自己否定として現れることとなります。こんなはずじゃなかった、という自らの失望と逃避が、この「絶望」の特徴です。

三番目の「絶望」は、自分の本質を認められないことにより生じた苦しみを、怒りとしてぶつけてしまう在り方です。思い通りにいかない苦しみ、他者への憎悪と攻撃として現れることとなります。こんなはずじゃなかった、という被害者意識と怒りが、この「絶望」の特徴です。

これらの「絶望」は、どれも人間の弱さを的確に

示しています。思い返せば誰しもに心当たりのある状態です。私は、これらの「絶望」を如何に認識できるかが、自らの本質を確かめる上での鍵になると考えています。

すべての人に言えることですが、自分と向き合うことは人生における重要な課題です。そして、世の中が混乱すれば、それは一層大切な事となります。生きていけば恐ろしいことは沢山ありますが、本当に恐れるべき「死に至る病」とは、自分を見失う「絶望」なのです。



徳法寺からのご案内

心の相談室

毎月第四土曜日の午後三時から午後五時まで、横安江町商店街にある「いちよう館」二階にて真宗大谷派の僧侶による「心の相談室」を開いております。個室で相談をお受けします。仏事はもちろん、家庭や職場、学校など、どのようなお話もお聞きします。相談は無料です。予約も必要ありません。相談内容は一切外に漏れることはありませんので、お気軽にお訪ねください。ただし、新型コロナウイルスによる自粛要請がある場合は休ませていただきますのでご了承ください。

心の相談室公開講座

発達障害者の就労と支援

—支援疲れにならないためには—

七月五日(日)午後二時から、東別院で発達障害の講座を開きます。講師は、一昨年、昨年に引き続き、宮田慎太郎氏にお願いいたします。発達障害者に対する理解は、少しずつ広がっています。法律により就労支援も行われていますが、実際に仕事を通して向き合うと、様々な問題が生まれているようです。そこで今年は、発達障害の当事者であり、啓発運動もなさっている宮田慎太郎氏に、どのように発達障

碍者と接したらよいのか、という視点でお話をしてもらいます。

サンガ茶話会

毎月第一木曜日の午後三時から午後五時まで、横安江町にある東別院敷地内「真宗会館」一階囲炉裏の間にて「心の相談室」スタッフによる「サンガ茶話会」を開いております。座談形式となっております。僧侶やその場に集まった方々とお話しませんか。いろいろな方に聞いてほしい話、聞いてみたい話がある方はお気軽に参加してください。他の参加者の話を聞いているだけでも構いません。参加は無料です。予約も必要ありません。出入りも自由ですので、途中参加、途中退室でも大丈夫です。お茶とお菓子を用意してお待ちしておりますので、お気軽にご参加ください。ただし、新型コロナウイルスによる自粛要請がある場合は休ませていただきますのでご了承ください。

徳法寺仏教入門講座

毎月二十一日午後七時半より

- 五月 仏教以前2 — 道教・儒教伝来—
- 六月 仏教伝来
- 七月 仏教と神道・道教・儒教の関係

今年から、仏教入門講座の第二章として、日本仏教史を行っております。四月は新型コロナウイルス対

策として休講いたしましたので、五月に講義内容をスライドさせます。五月に関しましても、様子を見ながらの開催となりますのでご了承ください。

ひと月講座がずれましたので、五月は仏教が伝わる以前に日本へ伝来した道教と儒教のことを予定より少し詳しくお伝えできると思っています。六月からはいよいよ仏教の伝来です。神々や鬼神との対話を説く神道・道教や、先祖や社会とのより良い関係を説く儒教に対して、自分自身の在り方を問う仏教という教えが、どのようにして日本人が受け止めたのか、というお話です。

多少の雑談を交えながら、ご参加の方々の質問にも答える形の講座です。関心のある方はぜひ参加してください。参加費はお賽銭のみです。

徳法寺報恩講延期について

毎年五月に執行しておりました徳法寺報恩講ですが、新型コロナウイルスによる自粛要請により、今年十一月に延期いたします。詳細につきましては十月に発行いたします寺報にてご案内いたします。

表題揮毫 中田 八千代

徳法寺 石川県金沢市野町二丁目三二番四号

TEL 076 (241) 5219

ホームページ <http://tokuhou-ji.com>